Popper 理論の情報学への適用に対する批判的検討

－客観的知識の Popper 哲学内部の関連性に着目して－

Critical studies for Information Science related to Popper's theory: Objective Knowledge and the inside of Popper's philosophy

岡部晋典
OKABE Yukinori

This article discusses an idea of Objective Knowledge that particularly caught the attention of a field of Information studies back to 1980's. Objective Knowledge, proposed by a philosopher of science K. R. Popper, shows similar tendency of the theory of Information Space that does not assume the basis of recognition. This article does not only bring up the relevance to other theories propounded by K. R. Popper such as Falsifiability and Open Society, but also discusses the solution which subtends Popper's Falsifiability to skirt the issue of existing view which has been criticized in the context of Objective Knowledge and Falsifiability.

キーワード：カール・ポパー，情報学，客観的知識，世界３，反証可能性，開かれた社会
Keywords: Karl Popper, Information Science, Objective Knowledge, World III, Falsifiability, Open Societ

1 はじめに

1.1 目的

本稿では，科学哲学者 Karl R. Popper（1902-1994）が 1967 年の講演（Popper, 1972＝1974）で提唱した「客観的知識論」を中心に論ずる．Popper の客観的知識論は，1980 年代に情報学の領域において注目を集めた経緯がある．

これまでにも情報の概念を定位させようという試みは数多くなされている．吉田による四つのレベルに分けた情報の定義や（吉田，1990），田中による「表現された区別」（田中，1994），正村による写像を媒介とした論考（正村，1997）などがあげられよう．また，後述する B.C.Brookes による「受け手の知識構造に変化を与えるもの」という定義も図書館情報学では良く知られている．

田畑は情報概念を反意語から炙り出す論文の中で様々な情報概念を手際よく整理し，人間の受けるあらゆる刺激を情報と捉える人間中心情報一元論と，人間を除去した完全な情報一元論の対立の構図を紹介している（田畑，1999）．本稿において取り扱う概念は「認識主体なき認識論」と Popper が呼ぶように，後者の一例と思われる．そこで本稿では Popper のテキストに立ち戻りつつ情報学と Popper の関係性について試論を加えることを目的とする．

1.2 哲学的基礎づけへの欲求

Popper の客観的知識論は，Bertram C.

Brookes（1910-1991）によって情報学の基礎づけ理論として提案された（Brookes, 1980a=1982；1980b）．彼における情報学とは，現代の図書館情報学を指す[1]．

詳細は後節において論じるが，客観的知識論は人間主体から離れた知識世界を論じるため，情報学に有益な視座を与えるものと当時みなされていた．我が国でも比較的初期に反応したといえる村主によるレビュー論文が存在する（村主，1986）．またPopperの理論を情報学に導入したBrookesに対する研究は 90 年代以降もしばしば現れている．以上，客観的知識論は情報学者のなかでは一定程度に知られた議論であるように思われる．

しかし村主が後の論文で指摘するように（村主，1997），Popperの客観的知識論は90年代に入り，P. Vakkariらによる情報の認知的アプローチを主眼とする研究が主流になるにつれ下火になったとされる．その一方，現在も情報学に哲学的基礎づけを行おうという動きは多く存在する[2]．哲学的理論を欲する姿勢について松林は「図書館情報学（LIS）に関わる新たな理論探求は，LIS の危機と併せて議論される傾向が強い」（松林，2005）と論じている．

一方，図書館の実務に勤務する人間にとって哲学的理論など必要ないという意見も根強くある．例えば客観的知識論を情報学に導入するBrookesに対し激烈に反対したRuddによる，「実際の情報学には便利ではない」（Rudd，1983）という批判が端的に示される．それらの批判があるものの，本稿では改めて Popper の客観的知識論に批判的検討を加える．Popperに再度焦点をあてるのには以下の理由がある．

Popperの客観的知識論は，従来の情報学の受容過程では数々の誤読や読み落としに晒されてきた．客観的知識論の体系的読解作業は国内外含め情報学ではほとんどなされていないにも拘わらず，従来の研究は Popper の議論を一部だけ誤読して抜き出し，皮相的理解の下で議論が行われている．一方，先に述べたように情報学の哲学的基礎付けを要求する姿勢は強い．統一的学問として情報学が成立するために哲学的基礎付けが必須と論ずるBrookesの発言自体が妥当か否かの議論がありうるとしても，新しい理論導入一辺倒で，理論の「消費」を行うことは長期的に見ても非生産的である．それゆえ Popper の客観的知識論という，もっとも初期の情報学の哲学的基礎付けに立ち戻り，再考することは意義がある．さらには近年のウェブ情報に関する諸言説で散見されるサイバースペース論や情報空間論の嚆矢とも位置づけられよう．

そもそも Popper の哲学は，科学哲学から政治哲学，果ては脳科学に至るまで，幅広い分野に目配せしたものである．そこで本稿では Popper の客観的知識論について彼の他の著作との統一的な視点を持たせながら論じる．それによって Popper の客観的知識論の理論的な有効性を示したい．

1.2.1 先行研究の系列と本稿の構成

本稿の先行研究の系列は二種類に分類される．一つは客観的知識論そのものを問い直すもの，もう一つはそれを肯定的に評価し，情報学の基礎理論，つまり共通の思考の基盤として適用するものである．前者は主に哲学界においてなされ，後者は情報学でなされていた．そのため，本研究は二系

列の先行研究の枠組みを採る．よって，両者の議論を管見の及ぶ範囲で踏まえて議論を行う．

1.2.2 日本での受容

客観的知識論について，わが国に限らず，海外の反応も特に芳しくない．とくにPopperの場合，客観的知識を提唱しはじめた1960年代以前に，他のさまざまな有名な概念を提唱している．つまり，前期Popperのインパクトが強力なため，客観的知識論についての反応は無視に近いものがある．これについて山脇は「ポパー思想を専ら初・中期の著作の中でしか読みとろうとしない多くのポペリアンないし批判的合理主義者によっては，ほとんど真面目にとりあげられていないように思われる」（山脇，1994 : 166）と述べている．加えて「Popper哲学の番頭」と呼ばれるH. Arbertなどの，西洋の哲学者たちが客観的知識論に対し無視に近い態度を取っているため，平板なPopper像が流布したと批判している．事実，4.1で詳解する，客観的知識論と反証可能性の関連について言及した研究は数少ないながらあるものの，批判的検討まで加えた研究は見あたらない．わが国でもほとんど先行研究はない．科学哲学者の伊勢田は，後期ポパーの哲学は主体なき知識等のキーワードを中心にしつつ緩やかな体系を持っているが，初期の反証主義に比べると後期Popper のインパクトは限られると指摘している（伊勢田，2006）．

少ないながらも目をひくことができるものに，浜井による批判がある（浜井，1975）．浜井は反証可能性と客観的知識の関連性ゆえに客観的知識論は破綻するとPopper を批判する．ほとんどの研究者が客観的知識論と反証可能性の関連性について関心を払わないなかで，二者の関連を明確に示している浜井の議論は高く評価できる．また浜井と同じ枠組みで議論しているものに，世界３の拡張として世界４を唱えた研究が存在する（橋本，1992 ; 1994）．しかし彼らの批判は，Popperのテキスト自体から回避可能と筆者には感じられる．詳細を後節5.2において述べる．

1.2で紹介したように，情報学における先行研究としてはPopper の議論を情報学に導入する提案を行ったBrookesによる一連の論文が存在する．また，村主はBrookesによる情報学への適用と付随する論争を丁寧に紹介している．

しかし情報学における先行研究の欠点は，Popperの客観的知識論を彼の"勲章"と呼ばれる反証可能性や，開かれた社会との関連を欠落させ，客観的知識論のみを取り出して検討している点である．これによりRuddによる，Popper理論自体が実際の情報学に役立たない抽象的理論に過ぎないという批判が成立したと考えられる．この批判の背景には，図書館の現場や，実際の社会そのものと「理論」の乖離という，おなじみの齟齬があるようにも思われる．

本稿では以下の章立てを採る．第２章では客観的知識論について紹介する．第３章では客観的知識論が情報学でどのように受容されてきたかを示す．第４章では客観的知識論がPopper の提唱する他の概念と近接することを示す．具体的には，反証可能性と開かれた社会を取り上げる．その上で，第５章では従来の客観的知識論への批判を再度検討し，情報学へ裨益する方向性を提

案する．

2 人間から離れた知識世界－客観的知識

客観的知識論[3]は Popper 後期の着想である．Popper は世界を三つに分類し，それぞれ「世界１」「世界２」「世界３」と呼んだ．世界１は物理的な身の回りの世界，世界２は個々人の頭の中の主観的精神の世界，世界３が記録されたものによって成立する世界（Popper，1972=1974；1976=2004；1992=1999）であり，客観的知識の世界であるとする．この客観的知識論は心身二元論の拡張であると Popper はいう．世界１，２が従来の物体と精神の二分法に対応し，世界３としてイデア論的な世界を加えたものと解すことができる．実際に Popper 自身，概念的に非常に近接性があるのはプラトンのイデア論であると述べている[4]．

Popper の客観的知識論を端的に把握するには論文集『客観的知識』(1972) が妥当である．しかし Popper の客観的知識は他の Popper の著書でも登場するため，本稿では各図書を横断的に扱い，客観的知識＝世界３について説明する．

世界３は，粘土板，楽譜，書籍など形態は何でも良いが「記録されたもの」によって成立し，そしてそれ自身は人間の主体的な作用を離れ永続性・客観性を持つ世界のことである．Popper は世界３の存在として，理論，論証や歴史的記述，あるいは芸術なども含めている．

具体的に世界１，２，３を例示すると，二冊の同じ内容を持つ本があるとする．二冊の本が現実世界に存在するという意味で世界１には「二冊」存在する．しかし記録内容は同一であるので，世界３では一つとされる．その本を読み，人間が仮に知識を得ると，それは世界２の知識である．新しい本の著述が行われれば世界１の存在が新たに生成すると同時に，世界３の内容も新しく作られる．つまり，Popper によると，記録物とは世界１の存在でありつつ，世界３の存在でもある．

前述したようにイデア論を考慮に入れれば，Popper のイメージしている世界３が容易に捉えられる．もしくは科学法則は自然界に「埋め込まれており」，それを発見していくのだという素朴実在論の立場も Popper の世界３理論への理解を促すかもしれない．それによって「人間主体から切り離された知識は存在する」という彼の主張が明確になる．

だがプラトンのイデア論の立場に立っていては Popper の強調する観点が見えてこない．イデア論や素朴実在論からはある意味では全く正反対の立場を Popper は採る．例えば Popper はこのように書いている．

> プラトンの第三世界は神的なものであった．それは不変であり，またいうまでもなく真であった．したがって彼の第三世界と私の第三世界とのあいだには，おおきな懸隔がある．私の第三世界は人間によって作られたものであり，変化するものである．それは真なる理論だけでなく偽なる理論も，また特に未解決の問題，推論および反駁を含んでいる（Popper，1972=1974：142）．

Popper のいう世界３が実在するか否かには議論の余地がある．本稿では Popper の文脈に寄り添って考えることを優先させ

るため実在の有無への問いは発しないが[5]，あるという見方も出来る．活版印刷の発明前までは図書[6]といえば基本的に手書きであった．ここにおいては写本を行うものの主観が入り込むため，しばしば誤字や脱字が発生した．しかし活版印刷の発明以降，機械的に文字を生産することが出来るようになり，写本家は介在しなくなった．つまり活版印刷の意義とは「意味解釈の存在しない情報」を作り上げることに成功した点にあると述べる論者もいる（西垣，1999）．これらの情報空間的な考え方，印刷物に限らず電子情報等も大量に機械的に処理する現代社会状況があるなかで，Popper の思想は先駆的発想と位置づけることもできる．

ここでひとまずイデア論と Popper との共通項と異質項を整理すると以下のようになる．Popper は認識主体（＝人間）から独立した知識世界を想定している．つまり経験世界を越えた神的世界が存在するという意味で，プラトンのイデア論と近接する．しかし Popper が言うには．記録物とは人間が生成したにも拘わらず，人間から独立して存在する．プラトンのイデア論はア・プリオリに神的世界を想定し，Popper はア・ポステリオリにも拘わらず人間主体から離脱していく神的世界を想定しているという捉え方が妥当である．また，プラトンの神的世界は真なるもののみで構成されるが，Popper は絶対的な真という考えを反証可能性に基づき生涯にわたって拒否し，その代わり漸近的な真という概念を採用している．

とくに未解決の問題や理論が世界３に属するという考え方が Popper の発想のユニークなところであり，従来の批判からの脱出の手がかりになる．問題状況，つまり真偽判定が未解決のグレーゾーンに存在する問題が世界３の要素になりうるという発想は，従来の反証可能性による客観的知識論への批判への再返答となろう．詳細は後節 5.2 に譲る．

Popper は記録物が人間の時間的な制約を超越していくことを強調する．B. Magee は客観的知識論を評価して以下のように言う．

> 世界３に存在するすべてのものは人間精神の所産であるが，……それらはあらゆる認識主体から独立して存在しうる．したがって，人間の頭の中にある知識よりもずっと図書館の知識のほうが重要である（Magee，1985=2001：80）

Popper は，世界同士は相互作用すると述べ，飛行場の建設という例をあげる（Popper，1992=1999：151）．飛行場を建設するためにブルドーザーを設計する．設計者の頭の中（世界２）の諸概念は書き記され，設計図として物体としては世界１でありつつも，世界３の存在となる．その設計図を誰かが読むことによりブルドーザーを設計，製造，使用し，世界１の体現としての飛行場を構築する．このように記録物を媒介とし，誰かの思考が別の誰かに伝達することを Popper は世界３という装置を用いて説明したといえよう．

一方で人間が生成するからこそ誤った理論等が生成することもありえる．そこで，Popper は誤った理論がいかに棄却されていくかを述べる．

いくつかの誤りを犯したために，ともに間違った定理―例えば５＋７＝１３という定理－に到達した二人の数学者をとりあげてみよう．……これら二人の数学者は，世界３の論理構造によって蹴り返されることになろう．というのも，世界３の論理構造は，二人の数学者のいわゆる定理なるものが「５＋７＝１２」という客観的に真なる言明に矛盾し，したがって客観的に偽でなければならないことを示すからである．他の人によってというのでなく，算術の法則そのものに蹴られたのである（Popper：1992=1999：153）．

Popper はこのように述べ，誤った言明であろうと世界３に属しうるが，世界３の自律性によって棄却されると述べる．この自律性により誤った知識が棄却されていくという過程は Popper の反証可能性と密接に絡み合っている．

以上が Popper の世界３説の手短な紹介である．次章ではいかにして Popper の客観的知識論が情報学に受容されてきたかを記す．

3 情報学における Popper 理論の受容

情報学において，80 年代に Popper 理論を基礎理論として適用することを提案した人物に 1.2 で挙げた Brookes がいる．Brookes は計量情報学で著名な研究者であり，またイギリス，シェフィールド大学の図書館長及び Library Association 会長をつとめるなど，評価を確立していた学者である．Brookes の提案は，「情報学の基礎」と題された四編の論文で知られている（Brookes，1980a=1982）．Brookes は当時，情報学の現状は様々な領域の学問をかき集めた混成学問であるという事実を，苛立ちと共に指摘している．それゆえ彼は情報学を独立した一つの学問領域として成立させようと試みた．Brookes は北米のある情報学の大学を尋ねたときの体験から，情報学を学ぶには，統計学，コンピュータ科学，コミュニケーション論など，ばらばらの要素を学生自身がまとめあげる必要があり，そこには一貫した視座が欠落していることを批判している．そのため，情報学を他の領域と異なる統一的な学問を扱う確立した学問領域とするためには，＜情報学とは何か＞という基礎研究を行うことが必要であると唱えている．

Brookes はそこから哲学的基礎付けを欲し，辿り着いたのが Popper の客観的知識論である．情報学には基礎理論が必要であると現在でも様々に叫ばれており（7），Brookes はその先駆者と見なすことができる．その後，Brookes はもともと計量情報学の泰斗でもあったため，世界３を数量的に計測するという手法へと突き進んでいった．

Brookes によると Popper の客観的知識論を情報学に導入するメリットは以下，三つあるという．

1. 客観的知識の例に図書などのメディアが挙がっており，Popper の議論をそのまま情報学の領域にスライドさせうる
2. 客観的知識論を利用することによって検証可能で客観視できる学問領域として情報学が成立しうる
3. 客観的知識論は他の学問領域が扱っておらず，独自性を保ちうる

一見，客観的知識論を情報学に導入したBrookesの試みは野心的であり，Popperが図書の重要性を説いていたことを巧妙に味方につけている．しかしPopperのテキストに立ち戻ると，Brookesの一連の議論は，Popper哲学の一部を限定的に抜き出し議論している性質が強い．

一方，哲学者・社会学者らによってPopperの客観的知識論を他のPopper哲学と関連させた議論は存在する．例えばPopperの哲学体系から客観的知識論は逸脱しており奇異なものに見えるにも拘わらず，反証可能性と結びついた議論であると指摘した浜井の研究（浜井，1975）が認められる．次章以降では，反証可能性と客観的知識論の接合を唱えた浜井らを踏まえつつ，より発展的に客観的知識論と開かれた社会との接合も示していきたい．

4 Popper哲学内部での連関

4.1 反証可能性

Popperの提唱した概念のうち，もっとも著名なものが「反証可能性」である．反証可能性は科学と疑似科学[8]の区別を行う規準であり，「境界設定問題」に一石を投じた．Popperは20世紀初頭の学問サークルであるウィーン学団，つまり論理実証主義者の周辺に位置していた人物である．論理実証主義はWittgensteinの「語りえぬものについては沈黙しなければならない」のテーゼを引き，「およそ言いうることは，明瞭に言いうる」をモットーとしていた．論理実証主義者が目指したのは科学の定義であった．

ただし論理実証主義の「意味の検証理論」，つまり検証可能性は有効に機能したとは言い難く（飯田，1989），論理実証主義を乗り越える形で提出されたのがPopperの反証主義（方法論的反証可能性）である．研究者によって反証可能性の解釈は一様ではないが，あえて表現すると≪科学的な理論は，自らが誤っている可能性のテストを理論自らが考案できる．他方，疑似科学的な理論はテストを考案できない≫となる．

論理実証主義者が目指したのは科学的理論とは何かを定義することであった．しかし，観察から出発し理論をうち立てようとする試みは困難に陥る．「全てのスワンは白い」などといった，全ての○○は××である，という全称命題を採る「理論」に対し，観察は個々，つまり単称命題から出発する以上，百万羽のスワンを観察しても全てのスワンが白いとは言い切れない．Popperは，単称命題から全称命題を導出する帰納法の困難を「Humeの懐疑」と名づけ，この困難ゆえ論理実証主義の試みは破綻したと言う．そのかわり科学とは何かという定義を問うのではなく，科学でないものは何なのかという，科学と疑似科学の境界設定へ問いを変換させたといえる．

Popperは論理実証主義の周辺に人脈的に位置している．そのためPopperを実証主義者と単純にみなす誤解は多くあるが，その点をPopper研究者らが批判することも多い（小河原［編］，2000）．

反証可能性のアイデアを着想した最初期のものは，Popperの博士論文「思考心理学の方法と問題」（1928）であり，Popperはその概念を生涯にわたって持ち続けた．PopperはKuhnなどの「新科学哲学派」から浴びせられた批判とそれに対する応酬，いわゆるパラダイム論争を経た後に，反証可能性の概念を再解説した『実在論と科学

の目的』(1983=2002)を著している．反証可能性自体を網羅的に論じたものとしては『推論と反駁』(1963=1980) が有名であるが，本稿における反証可能性の定義はほぼ『実在論と科学の目的』に準ずる．

Popper の反証可能性は先に述べたように，疑似科学との境界設定問題である．科学であると主張するためには自らが間違っている可能性を認める姿勢が必要であるという議論は，近年多くの文献で言及される．

以下で，Popper が Kuhn の反証可能性理解に対して不満を表明している点を具体的に説明する．Kuhn らは水星の近日点移動が相対性理論の構築以前に発見されていた事例を示し，ニュートン力学の反証には水星の近日点移動が有効に働かなかったことから反証には理論を覆す力はないと批判する．

この点について，論理的な意味の反証可能性と実践レベルの反証可能性を Kuhn らが混同していると，Popper や Popper 研究者はしばしば指摘する．例えば疑似科学の頭目と見なされる血液型性格診断は，論理的に反証可能性を持ちうる．しかし実際にテストした場合には逸脱事例の多さによって棄却されてゆく．一方，占星術を科学的理論だと見なした場合，どのような逸脱事例であろうと，占星術という枠組内で言い逃れが可能である．そのため，占星術は論理的な反証可能性すら持たず，血液型性格診断より一層強く棄却される．

Kuhn の誤解の根底には，理論からの逸脱事例とは，理論の棄却すなわち反証を即座に要請するものという考え方がある．Popper によると理論と整合性のない逸脱事例は，言い逃れができないのであれば，「理論のどこかがおかしい」ことを示す目印であり，かつ，問題提起の他とない機会とされる．

反証可能性とは反証が一つ見つかれば即座に理論の棄却を要請する決定的なテストであり，狷介な方法論であるという見方は多くある．しかし，科学か疑似科学かには厳密な境界があるのではなく，中間地点にグレーゾーンがある，緩やかな規準であることを Popper は強調している．この緩やかな棄却のありかたという捉え方こそが，客観的知識論を従来の批判から救う方策になると思われる．

以上，反証可能性をいくらか精密に追った．次節では Popper のいう「開かれた社会」の概念を記録物との関わりに重点を置いて紹介する．

4.2 開かれた社会

Popper が生涯に提出したアイデアのうち，反証可能性と並び良く知られているものが「開かれた社会」である．この概念を全面的に提出したのが『開かれた社会とその敵』(Popper1950=1980a,1980b) である．Popper が 1946 年に刊行したこの図書は，F. Hayek の『隷属の道』と並んで，自由主義の古典的基礎付けの書として扱われている．「開かれた社会」ないしは"Open Society"という言葉は，近年，様々なところで目にする．本稿では大著の『開かれた社会とその敵』に詳細に踏み込むことは避けるが，「開かれた社会」の対概念となる「閉ざされた社会」を Popper 流に紹介すると以下のようになる．

「計画」ないしは「"科学的"理論」によって裏打ちされたと僭称する社会計画は他

者の批判を受けないがゆえに，軌道修正の機会を逸し，結果としてディストピアを招く．これを具現化したのがナチスのアーリア人を優秀とする"科学的"理論であり，マルクス主義者やフロイト主義者にも同根の発想―自らの理論を科学と自称すること―があると警告する．

一方の「開かれた社会」は，その正反対の立場を採る．自らは誤りうるという可謬論に立脚し，自ら，あるいは他者が間違っている可能性を前提とし，社会計画の軌道修正を当然とみなす．これによりディストピアの帰着は招かない．誤りを指摘する相互批判によって社会を漸進させていこうという思想が「開かれた社会」観である．この姿勢は反証可能性の議論によって裏打ちされている．反証可能性はそもそも自らの過ちをテストすることが考案できるかという概念であり，科学に対する方法論である．可謬論の方法を社会や政治に適用したものが「開かれた社会」の概念とみなすことができる[9]．

『開かれた社会とその敵』は，ユダヤ人である Popper が第二次世界大戦中，迫害を逃れたニュージーランドで執筆された．この図書の内容は端的に言えば反ナチスおよび反マルクス主義である．Popper は歴史法則に従って社会が発展していくという思想を二者のなかに見，賢人政治を理想とする思想に批判を加える．賢人政治は常に間違ったことを許容せず魂の異端審問を行うに至ると Popper は述べる．彼は賢人政治の発想をプラトンの『国家』に見，西洋社会の歴史法則主義の伝統の芽はプラトンにより蒔かれたと指摘する．

Popper の「開かれた社会」観は，冷戦時の資本主義陣営と社会主義陣営の対立軸の中で資本主義陣営の優越性の根拠として読まれてきた過去がある．

マルクス主義者からは評価の低い『開かれた社会とその敵』であるが，時代背景的な文脈を切り離して考えると，開かれた社会と情報学の議論は思想的に接近しうる．

Popper の「開かれた社会」の概念は 1946 年の時点では重みづけの方向がいささか「反マルクス主義」に偏っているものの，基本的なテーゼは「相互批判による社会の漸進」である．1946 年の『開かれた社会とその敵』では，歴史法則主義批判が前景化している一方で，例えば『よりよき世界を求めて』（Popper，1984=1995）や『フレームワークの神話』(Popper，1994＝1998) では直接的なマルクス主義批判は影を潜め，批判による相互討論によって社会を漸進させていくという Popper の「開かれた社会」観が前景化してくる．

この「開かれた社会」の概念は，従来，討論による社会の漸進という点に重点を置いて注目を浴びてきた．しかし，Popper が強調するポイントには，媒介としての記録物が必要という点がある．つまり会話はその場限りで消散するが，記録物を媒介とすることで，現場にいないものも参加可能な批判が可能である．

Popper 研究で著名な小河原は，客観的知識論と反証可能性から導出される批判的合理主義とを結びつけ，以下のように論じる．我々の産み出した知識は常に可謬的であり，それゆえに批判的再検討に開かれている．誤った客観的知識の存在を暴力的な方法でなく，理性的討論によって排除することが Popper の批判的合理主義の肝要である（小

河原，1994：67）.

西洋の自由観を念頭に置いていると断っているものの，Popperは，記録物が媒介することにより社会が進歩した嚆矢としてギリシャのアテナイをあげる．ペイシストラトスによるホメロスの出版が「開かれた社会」への礎になったと Popper はいう（Popper，1984=1995：173；1993：23）．彼はキケロの資料に依拠しながらホメロスの出版を書籍市場の成立として位置づけ，それがアテナイの民主主義運動に寄与したと述べる．記録物が入手できる環境こそが Popper によると社会を批判的に漸進的に進めるための基礎であるという．このギリシャ時代の出版の規模を，より巨大に反復させたものがGutenbergによる活版印刷であるとPopperは論じている．

これらの議論に通底するのは，記録物，つまり世界３的存在を媒介にすることにより，社会が発展するという発想である．つまりソクラテス流の問答法を書物という媒介をもとに捉えなおしたものである．Popper はその場限りで消え去るような発話行為のみをコミュニケーションと捉えるのではなく，記録物によって過去を参照可能な形にすることが重要であると唱えている[10]．

以上，本節では Popper 諸概念の繋がりを論じた．前半では開かれた社会と反証可能性，後半では開かれた社会と客観的知識論がそれぞれ連関していることを論じた．

5 従来の批判とその回避

5.1 客観的知識と反証可能性の関連による批判

本節では，これまでに検討した議論をもとに，1.2.2 で紹介した浜井および橋本の先行研究を再検討する．哲学の領域では，情報学とは異なり，反証可能性と客観的知識論の関連を示した先行研究がわずかに存在する．これらでは客観的知識論と反証可能性との繋がりかたが批判されてきたが，この批判を再検討するのが本節の目的である．

浜井は，客観的知識論は反証可能性と関連すると明確に指摘しつつも，一方で以下のように批判する．Popperは世界３の住民として「芸術」を科学的知識と同列に考えている．客観的知識論における知識は全て反証可能性に晒されるが，芸術は反証可能性を持たない．ゆえに，客観的知識論は反証可能性と接合しているため，内在的に破綻に陥ると浜井はいう．浜井は，Popper が Popper 哲学の最大の勲章たる反証可能性に拘泥せず，反証可能性と客観的知識は独立のものとして捉えるのであれば，客観的知識論の破綻は回避可能であると論じる．よって浜井は反証可能性と客観的知識の関連性をまずは示唆しつつ，Popper 理解の内在的解釈として最終的にはそれを否定していることになる．

他方，橋本は世界３の領域を科学的知識のみの世界とし，芸術を世界３の領域外に位置させる．橋本は，反証可能性の有無で科学的知識と社会的知識―例えば Popper が客観的知識論の「主要な住民」としてあげる芸術などーを切り分ける．そして社会的知識については，別の「世界４」の概念に分類にするのが妥当であると論じる．この世界４の概念の導入により，世界３と反証可能性の円滑なつながりを橋本は試みる．

これら両者には，反証可能性と客観的知識論の接合を模索する発想が通底する．こ

の視点は情報学への Popper 理論の導入者には欠落しているものであり，高く評価できる．しかし，浜井，橋本の議論は反証可能性の適用のありかたからすると再批判が可能なようにも思われる．そこで，次ではその批判の妥当性を検証する．

5.2 回避法

浜井らが示す客観的知識論は反証可能性ゆえに自爆するという考え方も充分説得力がある．確かに Popper の知識観は，科学的知識に主眼が置かれている．客観的知識論を論じるテキストには芸術についての論及はほとんどないにも拘わらず，芸術的知識も科学的知識も同一的に扱い，客観的知識論の議論を進める Popper を批判することは可能であろう．

しかし『実在論と科学の目的』に記された反証可能性の概念からは，浜井の批判は回避可能であり，橋本の世界４を導入する意図も不要に思われる．4.1 で検討したように反証可能性とは，自らを科学とみなすものが「明らかに」体系から反した場合，偽として棄却される緩やかな方法論である．ここには真偽判断が行われていない「問題状況」に留まりうるグレーゾーンが存在する．Popper によるとグレーゾーンにある，確定しきっていない理論は世界３の存在である．

また，Popper は，科学か疑似科学かの境界設定規準として．反証可能性を掲げている．それゆえ，科学を僭称するため偽として棄却されるものと，そもそも反証可能性の有無が考慮されないがゆえ棄却されえない芸術などの区別は峻別可能である．

言い換えると，反証可能性の有無と，反証可能性によって棄却されるか否かの二つの水準の混同で，従来の批判が行われていたと思われる．

浜井らの議論では前者の反証可能性の有無のみを芸術，科学全てをひっくるめて適用し，反証可能性のないものを客観的知識の世界に含めると矛盾が生ずるという議論であった．一方，筆者は，反証可能性の有無ではなく，反証可能性によって棄却されるか否かの水準を検討する．客観的知識論と反証可能性の関連とは，反証可能性があるか否かの水準ではなく，いかにして棄却のプロセスが生成され，偽の知識が棄却されるかという観点に立てば，Popper の文脈から従来の批判を回避することができる．

以下に回避法を示す．

反証を受けたとしても棄却されず生き残る領域を積極的に肯定し，それが客観的知識の世界を構成すると想定すれば，反証可能性と客観的知識論は矛盾なく接合する．反証可能性の有無に拘わらず世界３の住民として棄却されずに生き残るのは，以下の３パターンになると思われる．

1. その時点の学問の水準における真なる言説
2. 問題状況にあるがゆえに，真偽判定が行われない，あるいは行われえないグレーゾーンの言説
3. そもそも反証可能性の有無を問われないがゆえに，棄却されようがない領域（＝芸術等）

以上のように考えれば，反証可能性と接合を保ちつつ，客観的知識論に Popper が芸術を含めたことを Popper 自身のテキストから擁護できる．

反証可能性は科学，ないしはそれに準ず

る科学を装った疑似科学への批判理論として成立していた．自らの理論を科学的理論と詐称しない限り，反証可能性は発動せず，棄却プロセス自体も生成しない．

このように『実在論と科学の目的』から議論を組みたてていけば，客観的知識論は内在的に破綻が生ずるという，従来唱えられていた批判は回避できる．例えば，巨大な亀の上に地面が支えられており，それが我々の地球の姿であるという「科学的知識」は棄却されよう．だが，人がそのように考えた歴史があることは真であり，かつ，反証可能性を適用したとしても反証されず，棄却されない領域にある．

以上をまとめる．従来，客観的知識論は反証可能性と関連するため破綻すると考えられてきた．しかし反証可能性における棄却のプロセスに注目するアプローチを採ることによって，客観的知識論の破綻は生じず，また反証可能性と客観的知識は接合を保ちうる．よって，先行研究で行われていた批判は回避可能であり，同時に，記録物＝客観的知識と接合する開かれた社会の概念も，Popper の議論の道筋通り把握することが可能といえる．

6 結論と今後の課題と展望

本稿では以下の議論を行った．1980 年代，情報学は Popper の客観的知識論を基礎理論として導入しようと試みた．これについて紹介し，その上で Popper の客観的知識論は，従来 Popper 哲学内部から逸脱していると思われてきたこと，他方，情報学領域の議論はその客観的知識論のみを抜き出したものと指摘した．その上で従来の考え方に対し，Popper 内部で連関があること，反証可能性や開かれた社会の概念と関連することを示した．加えて，反証可能性の概念から自爆すると批判されてきた客観的知識論を，Popper のテキストを読み直すことで救い出した．つまり従来の批判からの脱出を，Popper の反証可能性と客観的知識論の接合のありかたに注目して論じた．

本稿では客観的知識論と他の概念との接続を中心として議論し，情報学との関係について詳細には立ち入らなかった．そこで開かれた社会に注目しておく情報学上の意義について示しておく．

Popper の「開かれた社会」は 4.2 で論じたように記録物を媒介させつつ人々が議論することによって社会が漸進的に進歩するという民主主義的・自由主義的な思想の現れであった．「開かれた社会」というのは政治的にはナイーブな姿勢と思われている節もあるが，記録物を媒介に相互討論を実現させるという Popper の指摘は，情報爆発の時代の情報学にとっても有効であろう．

80 年代の Popper 理論を情報学に導入しようとした試みは，情報空間論などの認識主体なき情報観を情報学の中に醸成するに効力があった（村主，1996）．また，Brookes の提案を背景として，情報空間のなかから情報を取捨選択する行為として「検索」の理論的位置づけがなされたことも事実である（Ingwersen，1992=1995）．

この一方で，Brookes の提案したような計量情報学的に世界 3 を計測するという形に留まらず，開かれた社会へのまなざしを持つ議論が展開すれば，別の形での豊穣な議論が開けていく可能性もある．つまり，Popper の客観的知識論が開かれた社会と不即不離にあるということは，従来の客観

的知識論のみに注目する情報学の研究とは異なった議論が展開しうると思われる．例えば記録物を媒介とした民主主義的な相互対話を尊重する姿勢の理論的根拠ともなろうし，図書館・文書館が社会に貢献する上での理論背景ともなろう．更には，現代の情報化社会との関連を考えると，プログラムの開発形態の一つである，オープンソースの「バザール方式」とも通底する．これらオープンソース界隈で行われている作業はソースコードを開示することにより，他者による訂正を容易にするというプロセスである．これは Popper のいう「開かれた」概念とも近接する．あるいは近年の学術情報流通のなかで注目を集めている機関リポジトリやオープンアクセスなどの議論とも Popper の提唱した概念は繋がるように思われる[11]．

以上は，情報社会で見られる諸概念で，Popper 理論を用いることにより深く理解可能な事柄を列挙した．これらの諸現象を繋ぐ一本の道筋には，記録物を媒介としたコミュニケーションという現象が指摘できる．とくにウェブ上のコミュニケーションは，電子文字とはいえ文字を主に用いる行為が大半を占める．ドッグイヤーと言われるほど新陳代謝が激しいウェブ等の諸概念や諸サービスなどを一貫した視座で捉えるには，いったん，個々人に張り付いた主観的な知識という伝統的観念から離れ，客観的知識論のいう「認識主体なき認識論」のような視点の変容がありうる．Popper の議論から導出される，諸主体がどのように振る舞うのかという問いではなく，諸主体によって産み出された記録物がどのように振る舞っているように見えるのかという問いは，一つの新たな視座のありように思われる．無論，記録物を産み出す主体たる個々人に対するまなざしが欠落しかねないとの批判は可能である．しかし，Popper が強調する，客観的知識は人間精神の発露であるという点から，そのような批判は回避可能と考えられる．

本稿は，冒頭で引用した田畑の紹介「人間を除去した完全な情報一元論」の一つの立場を，Popper 理論を用いて精緻化した．本稿で論じたような，客観的知識論を論じることと反証可能性は不即不離であるという見解は，誤りを持つ言説を批判的討議に基づき排除する行為と同義である．Popper 哲学の大きなテーゼは，我々は，誤った理論を暴力ではなく，討論によって打倒可能というものである．Popper の見解は基本的に楽観的であることは否めないものの，ノイズや誤った言説の流布に対して（コミュニティによっては）即座に対抗的な言説が出てくるウェブ上のコミュニケーション[12]の説明原理たりうるのではないだろうか．

註

1) 本稿においては「情報学」として用語を採用する．80 年代当時において，Information Science の訳語には「情報学」があてられていた．
2) L. Floridi による PI(Philosophy of Information)などがあげられる．Floridi, L. (2002) : "What is the Philosophy of Information?", *Metaphilosophy*, Vol.33, No.1 & 2
3) 本稿では客観的知識論として用語を使用するが，研究者によっては世界３論とも呼ばれる．また翻訳によっては「第３世界」との表記もある．世界３論のほうが「客観的に得られた知」という誤解を招かず，正確だという見方もありえるが，本稿では「認識主体なき認

識論」を前面に押し出したいがため，「客観的知識論」を使用した．

4) Popper はプラトン批判を行いつつも，プラトンを高く評価している．実際に Popper は「私はプラトンとヘーゲルに対する私の反対的態度を聞きおよんでいる人たちに衝撃を与えることができたかもしれない」（Popper, 1972=1974:123)と断っている．

5) 本稿は Popper の文脈に寄り添って考えることを優先させるため，世界３の実在の有無については厳密には問わない．Popper によると，世界３の実在の根拠は, Kant のいわゆるコペルニクス的転回,「対象が認識に従う」という命題に立脚している（Popper, 1992=1999）.

6) 図書という記述を採用する. 本, 書籍, 著作など様々な呼び方がありえるが, 一般的な Popper の翻訳の記述に従う.

7) 例えば，R. Cappuro，L. Floridi，西垣通の一連の議論が参考になる．例えば西垣の問題意識から発したと思われる「共通の基盤を欠くならば，情報学は学問として定位することは困難になるだろう」との記述がある（西垣, 2004:7）

8) なお，科学ではない概念をどのように命名するかは議論がある．疑似科学・似非科学・非科学といった語が考えられるが, 本稿では疑似科学を採用する.

9) 反証可能性を社会的態度に適用させたものは批判的合理主義と呼ばれる.

10) しかしギリシャ時代においては書き言葉は喋り言葉より一段下に見られていた（Chartier, 1997=2000）. Popper も同様の注意を脚注で払っている（Popper, 1984=1995:183).

11) 本稿の議論は準備的段階に留まったが, この点について別稿を準備中である.

12) 例えば，疑似科学批判がゆるやかに盛り上がりを見せている昨今の状況などは，まさに批判的合理主義の発露のありかたの一つとして捉えることもできるだろう.

文献

Brookes, B. C.（1980a）: "The foundations of Information Science", *Journal of Information Science*, Vol.2 ＝（1982）岡沢和世・長田秀一・緑川信之訳「情報学の基礎-1-哲学的側面」『ドクメンテーション研究』, Vol.32, No.1

Brookes, B. C.（1980b）: "Information space", *Canadian Journal of Information Science*, Vol.5

Chartier, R. [et al.]（1997）: *Histoire de la lecture dans le monde occidental*, Seuil.＝（2000）田村毅〔ほか〕共訳『読むことの歴史―ヨーロッパ読書史』大修館書店

浜井修（1975）:「カール・ポパーの客観的知識論」『社会科学の方法』, Vol.8, No.10

橋本努（1992）:「ポパーの学習論と世界 4 論」『Popper Letters』, Vol.4, No.1

橋本努（1994）:「『世界４』論」『開かれた社会の哲学―カール・ポパーと現代―』未来社　所収論文

飯田隆（1989）:『言語哲学大全Ⅱ』勁草書房

Ingwersen, P.（1992）: *Information retrieval interaction*, Taylor Graham.＝（1995）細野公男他訳『情報検索研究－認知的アプローチ』トッパン

伊勢田哲治（2006）:「カール・ポパーの生い立ちと哲学」available : *http://ocw.nagoya-u.jp/files/45/sp_note03.pdf*（2008.10.21 access）

小河原誠（1994）:「開かれた社会と批判的合理主義」『開かれた社会の哲学―カール・ポパーと現代―』未来社　所収論文

小河原誠［編］（2000）:『批判と挑戦―ポパー哲学の継承と発展にむけて』未来社

Magee, B.（1985）: *Philosophy and the Real World*, Open Court.＝（2001）立花

希一訳『哲学と現実世界』恒星社厚生閣
正村俊之（1997）:「情報技術の革新と情報概念の刷新」『社会情報学研究』, No.1
松林正己（2005）:「情報哲学(the Philosophy of Information)」の誕生:図書館情報学理論研究における新たな動向」『カレントアウェアネス』, Vol.283
村主朋英（1986）:「Karl Popper の"客観的知識"概念とその情報学に対する意義」『Library and Information Science』, Vol.24
村主朋英（1996）:「情報学における情報空間の概念」『Journal of Library and Information Science』, Vol.10
西垣通（2004）:『基礎情報学―生命から社会へ―』NTT 出版
西垣通（1999）:『こころの情報学』筑摩書房
Popper, K. R.（1950）: *The Open Society and Its Enemies*, Princeton University Press.＝（1980）内田詔夫・小河原誠訳,『開かれた社会とその敵 第１部』未来社
Popper, K. R.（1972）: *Objective knowledge*, Clarendon Pr.＝(1974) 森博訳『客観的知識－進化論的アプローチ－』木鐸社
Popper, K. R.（1976）: *Unended Quest: An Intellectual Biography*, Fontana/Collins. ＝（2004）森博訳『果てしなき探求〈下〉―知的自伝』岩波現代文庫
Popper, K. R.（1983）: *Realism and the Aim of Science [1956]: from postscript to the logic of science*, Rowman and Littlefield.＝（2002）小河原誠・蔭山泰之訳『実在論と科学の目的 上』岩波書店
Popper, K. R.（1984）: *Auf der Suche nach einer besseren Welt*, Piper.＝（1995）小河原誠・蔭山泰之訳『よりよき世界を求めて』未来社
Popper, K. R.（1992）: *The Open Universe: an argument for indeterminism: from Postscript to the logic of scientific discovery*, Routledge.＝（1999）小河原誠・蔭山泰之訳『開かれた宇宙－非決定論の擁護－』岩波書店
Popper, K. R.（1993）:「ヨーロッパ文化の起源－その文学的および科学的根源」京都賞受賞講演『開かれた社会の哲学―カール・ポパーと現代』未来社　所収
Popper, K. R.（1994）: *The Myth of the Framework*. In Defense of Science and Rationality, Routledge＝（1998）ポパー哲学研究会訳『フレームワークの神話』未来社
Rudd, D.（1983）: "Do we really need World III?: Information Science with or without Popper", *Journal of Information Science*, Vol.7
田畑暁生（1999）:「情報の反意語は何か？－反意語から捉える情報概念の構造－」『社会情報学研究』, No.3
田中一（1994）:『情報とは何か』新日本出版社
山脇直司（1994）:「後期ポパー思想の特質と可能性－批判的合理主義を越えて」『開かれた社会の哲学―カール・ポパーと現代―』 未来社　所収
吉田民人（1990）:『情報と自己組織性の理論』東京大学出版会